

むよりはと也、人の善惡みな友によるといふこと也、三人行時、かならずわが師あり、其善者を撰て是にまたがふ、其よからざる者をば是をあらたむべし。

〔近世畸人傳^五〕有馬涼及

有馬氏涼及の名、父子兄弟に及ぼして、四世醫を業とす、^略○中 初代涼及號臥雲、又存庵といふ、後水尾院、特徵て御醫とし、階法印を賜ふ、^略○中 ある時急に召るゝに、折ふし碁を圍みて、參内遅々に及び、頻に御使を下さるれども、猶局を結ざりしかば、參らず、是に罪せられて京師を逐れ、大津に蟄す、然もほどなく召還されぬるとぞ。

〔因云碁話^七〕祇南海終身圍碁を絶事

紀藩の士、祇園與一は、十餘歳、一夜百首の詩を賦し、稍成長益進、詩名一時に高し、性又圍碁を好み、家にて一日客と碁をかこみ居たるに、隣家の婢あわてながら走り來り、今日主人の家、皆々他行、婢壹人留守として、幼年の子息を庭前にて遊し居たるに、側をはなれし、暫時の間に、兒あやまちて泉水に落給ふ、とく來て助け給はれと云すて、走り歸りぬ、與一は、今行べしといひながら圍碁に耽り、餘念もなくかこみ居しうち、時刻過ぬる故、遂に溺れて兒は死す、驚き悔めども爲べき様なく、隣家へ對し云解べき言葉もなく、其の日より終身碁局に向ふ事を絶たりと云、この話、侗庵古賀先生に聞ぬ。

〔曾呂利狂歌咄^五〕雙六をうつ人、もし七目を塞がれては、術なき事、腸を斷ちて悶え焦る、碁を圍む人は敵に取込められ、^{なかて}點おるされては、逃遁れんともものする有様、多く負けぬれば、後は腹立ち怒り、助言する人あれば、穴勝に怨を含む、誠に我執といひながら、愚なる事になん、味方を生して敵を殺さんと、手を盗み偽を構へ、主従父子師弟兄弟と雖も許さず、四重五逆の罪にも過ぎたりと、兼好がいひけんも道理ぞかし、これほどに心を入れてすべくば、何れの事か感應の上手となら